

注) 本作品データは「縦書き」「ルビあり」等での表示を前提に制作されています。ご覧になる端末、機種の設定を確認、調整の上でお読みください。

両刃剣の刀身が、ステンドグラスから射しこむ陽光に反射した。

大理石の台座に、まっすぐ突き刺さってるそれは、柄つかに三日月を模した彫り細工が施されている。

柄の先は俺の腰の高さほど。刀身がどれだけ台座に埋まっているかわからないから、剣の全長も判然としない。

「さあさあ、つかむのよさ、抜くのよさ」

少女の声が室内に響いた。

大理石の敷かれたフロアは、神殿と呼ぶにははばかられるほど狭い。出入り口の扉から最奥まで五十歩もかからない。目立つ装飾もなく殺風景。壁も武骨な石造り。

奥のステンドグラスの前に立つ月の女神像がなかったら、ここが神殿だと思う者はいないだろう。

「伝説の勇者の遺物、世界を〃〃に統べる聖なる剣——」

俺の他に人影はない。幼い少女の声は、女神像の前に浮かぶ一冊の本から聞こえてくる。

「邪神を討ち、平和をもたらした勇者が振るいし聖剣……—その志を継ぎし者よ、今こそそれをその手で抜くのよさ！」

露草色の表紙と背表紙に、紋章化した剣の印が押された本——魔道書ケンノトリセツ。開いた紙面を上にし、鳥のように浮かぶそれは、聖剣の台座の前に立つ俺を鼓舞した。

ごくりとつばを飲み込む。

抜くぞ、手に入れるぞ。

「やってやる……」

俺は勇者になる。その証となる聖剣を手に入れ、なんの取り柄もない、なにも手に入れられないただのリユートから、勇者リユートになるんだ。

「さあさあ、つかむのよさ、抜くのよさ、そしてその志を、願いを宣言するのよさ」

ケンノトリセツの言葉に眉をひそめる。

志？ 願い？

「月の女神に崇高な意志を示すのよさ。邪神を討ち、世界の安寧を望むとかなんとか」

崇高な意志？ 世界の安寧？

なんだそりや、と鼻白む。と同時に、やり場のない怒りと悲しみと不甲斐なさがこみあげてきて……やばい、泣きそう。

「どうしたのよさ？　かつちよよく宣言するのよさ。勇者になって世界を救いたって忘れよう忘れようと思うほどに、脳裏に描かれるひと。その顔、その笑顔。

リリア……。

胸中でその名をつぶやくと、ますます泣きたくなって、顔を伏せた。

「……………マジ、そんなの……………どうでもいい」

あふれた涙を袖口でぬぐい、舌打ちひとつ。それから顔を上げた。

「邪神を討つ？　世界の安寧？　……………知らんがな！」

「ん？」

ケンノトリセツの動揺を遮って、大声を放つ。

「俺は！ ……………俺は失恋した！」

「んん？」

「だから、もうやけくそで聖剣でも抜こうかなって！」

「んんん？」

「勇者にでもなんなきや、やってらんねえじゃん！」

「おい、待て待て待て」

「失恋忘れたいんで、聖剣抜きます！」

俺は高らかに宣言し、勢いよく両手を伸ばした。

大理石の台座に刺さった聖剣へ。その柄へ。

未練たらしく彼女を思い浮かべながら。失恋の痛みを胸を抉られながら。涙を堪えながら。大好きな彼女を手に入れることのできない俺は、やぶれかぶれのやけくそで、なんていうか……勢いで、聖剣を手に入れることにした。

月の守護殿と呼ばれる、小さな石の建物の中。

その中央、大理石の台座に刺さった聖剣の柄を、俺は両手で握った。

手のひらに伝わる聖剣の柄の冷たさ。しかしそれも徐々に種火の精霊ワラの吐息のような熱へ変わっていく。

気のせいだろうか。聖剣がブウンツと、わずかに鳴動している気がする。励ましてくれてみたいに。

「なんだかいけそうな気がする！」

よし、聖剣抜いて、勇者になって、失恋なんて忘れるんだ！

恋に破れた代わりに、勇者になって世界中の人から慕われる。俺に残された道はそれしかない。

「それでいい！それが俺なんだ！」

腰をやや落とし、全身に力を込めた。

深呼吸を一度。聖剣の柄をしっかりと握ったまま、両手でグイッと引き上げる。

いや、引き上げようとしたのだが――。

聖劍はびくともしない。少しも上がらない。渾身の力を両腕に注ぎ、

「ぬおおおおおお！」

雄叫びを上げてみたが、大理石の台座に刺さった聖劍は沈黙を貫く。

硬い、すっげえ硬い。さすがは聖劍、さすがは大理石、ハンパないぞ。

魔道書ケンノトリセツが空中を滑り、俺の前までやってくる。ひとりでにページが数枚めくられていく。

「あのなあ、崇高な志なくば、聖劍は永久に応えないのよさ」

「な、なんだよそれ？」

「失恋の腹いせに抜こうだなんて、そんなふざけた気持ちで聖劍が抜けるわけないのよさ」

「そつちこそふざけんな！ 失恋パワーはなににも勝るだろーが！」

「いや、勝らんし。ていうかなんで逆ギレしてんのよさ」

ケンノトリセツのため息を無視し、引き続き聖剣を抜くことに全力を注ぐ。

失恋して、聖剣も抜けず、勇者にもなれませんでしたでは、みじめすぎる。立ち直れそうにない。

だから抜く！ 失恋を忘れるためにも！ その悲しみを、痛みをなくすためにも！

「ぬおおおおおおお！」

しかしケンノトリセツの言う通りなのか、聖剣は俺の失恋パワーに応えてくれない。

しかもずつと中腰体勢で、両腕を使って引き上げようとしているため、腰と背中が痺れるように痛む。両腕の筋肉も、ふるふるると引きつつてきた。

しんどい。

額ににじんだ汗が粒となって、顎の先からぽたりと落ちた。必死な俺を嘲笑うかのように、聖剣の刀身はただ冷え冷えと光っている。

諦めはしない——………が、ちよつと休むか。

失恋パワーはいまだ有り余っているが、聖剣を抜くためには休憩も必要な気がしてきた。思った以上に聖剣動かないし。一休みしてそれからまた挑戦しよう。抜けるまで何度でも何度でも。

「よしっ、ひと休みだ」

息を吐き、力を抜いて仕切りなおそうとした、そのときだ。

「あ、ダメなのよさ。途中で手を離すと石になるのよさ」

ケンノトリセツが眼前でふわふわわわっと浮かんだまま、呑気な声で言った。

聖劍の柄から両手を離す寸前、その不穏な発言に動きが止まる。

「……………石？」

「石」

「なにそれ？」

「私利私欲で聖劍を手に入れようとする不埒な輩には、罰則があるのよさ」

「罰則？」

「聖劍を抜けずに手を離れた者は、石化するのよさ」

「……………」

いや、それも呪いの剣じゃね？